

# 仙 台 教 区 報

カトリック仙台司教区事務所  
〒980  
仙台市青葉区本町1丁目2番12号  
☎ 022(222)7371  
F 022(222)7378  
編集・発行 板垣 勲

## 仙 台 教 区 に 司 祭 召 命 を 求 め て

キャンぺーン実施、司牧評議会総会で決まる



年に二回開かれる仙台教区司牧評議会の総会が3月20日に開かれた。総会にはこれからの仙台教区を考えるため、教区内で長年にわたって話題にのぼっていた一粒会の見直しと、第2回福音宣教推進全国会議に教区としてどのように取り組むのかという議題が提出された。

開会の挨拶で佐藤司教は、信徒が主役になって日常の生活の中で福音の光をもたらす人になってほしい。そのために教区の中で大切な役割を持っている司牧評議員が、忌憚のない活発な意見を出すように、改めて要望した。

審議は、はじめに一粒会の今後について議案提出の経過説明があり、その中で司祭召命のために信徒が果たす責任と役割が大きいこと、長い歴史を持つ司祭召命のために活動している一粒会が信徒の会としてうまく機能していないことが指摘された。特に強調されたことは、多くの信徒は司

祭召命に果たす自分の大切な役割をあまり意識していないこと。その結果、一粒会の存在を知らない人が増えるなど、物心両面における司祭召命促進活動が、ごく一部の信徒の活動であるかのようになっていること。一粒会活動が教区全般に渡って低迷しているということだった。

最後に一粒会の見直しが総会の議題ではあるが、その前に信徒の司祭召命活動への関心を盛り上げるため司祭召命促進のキャンぺーンを始めたいとして提案説明が終了。

### 司 祭 召 命 促 進 キ ャ ン ペ ー ン

総会は審議の後、司祭召命促進の活動の重要性を認め、次のことを決定しキャンぺーンを実施に移すことになった。

① 一粒会活動を見直すに当たり、現在の一粒会の活動を続けながら、92年度に教区

民全体の活動として司祭召命促進活動に取り組む。

② テーマを「仙台教区に一人でも多くの司祭を」として司祭召命促進キャンぺーンを全小教区一斉に行なう。

③ 小教区の年間行事に仙台教区司祭召命の日を年3回(5・9・12月)設け、信徒の司祭召命への関心を高める。

④ 5月10日の第一回「司祭召命の日」に各司祭がミサの説教の中で自分の召命の体験などを話してもらう。

⑤ 「仙台教区に司祭召命を願う祈り」を印刷したカードを教区内に配布する。

⑥ 一粒会の見直しについては、来年の3月の司牧評議会総会で結論を出す。

以上のように、司牧評議会役員会で一粒会の見直しのため始められた話し合いは、司祭召命促進のキャンぺーンを実施するという決定を見ることになった。しかし、このキャンぺーンの成否はこれからの信徒の意識をどこまで盛り上げることができるかに関わっている。

仙台教区内でも司祭の老齢化と減少が目に見えてきている今こそ、教会で司祭が果たしている役割、司祭が信仰共同体の中で育てられていくことを考え、キャンぺーンをおして信徒の力を発揮する時としたいものである。

(次ページへ)

## 福音宣教推進全国会議について

第2回福音宣教推進全国会議（以下、全国会議）教区推進委員の梅津神父から、93年秋に長崎で開かれる全国会議のため教区でも準備を進めたいと全国の動きが説明された。しかし、評議員からの発言が少なく教区内の全国会議への理解、関心の低さが危惧されるような印象があった。総会では全国会議に向けて決定したことはなかったが、全国会議事務局に課題を提出するため司牧評議員会が教区内でアンケートをとることが報告された。

## 選任・初め定式

司教を中心に司祭の一致が現わされる聖香油のミサが聖水曜日にかテドラルで行なわれた。ミサ中に佐藤司教は仙台教区の神学生、田中丈夫（山形・長井教会）さんを宣教奉仕者に選任、小松史朗（塩釜教会）さん・和野信彦（東仙台教会）さんの兩名を助祭・司祭候補者に認定した。

今年、仙台教区では司祭叙階式はなかったが多くの人が列席した聖香油のミサは、新たな神学生の誕生と3人の神学生が教区民に支えられて召命の道を歩み続けることを願う祈りで満たされた。神学生たちは家族や多くの人の祈りに支えられて、司祭への道をさらに一歩進めることになった。

## 司祭昇昇

4月1日付

## 【教区司祭】

▼吉田昌民・司教館付（会津地区）

▼佐藤修・会津地区担当（浪打）

▼会津隆司・浪打教会主任（弘前）

【ケベック会】

▼R・ベルニエ・管区長館付（浪打）

【ベトレヘム会】

▼M・エンデルレ・遠野・釜石教会兼任

【グアダルペ会】

▼M・ヴァレラ・会津地区担当責任者

（須賀川）

▼J・モンロイ・メキシコ帰国（会津地区）

【区】

▼M・アントニオ・デ・ラ・ロサ

須賀川教会主任（同）

## 【その他】

▼三浦平三、笹氣直哉

当分の間、大船渡教会は近隣教会の両司祭とベトレヘム会の協力によって司牧する。

▼本間 重治・社会福祉法人カトリック

児童福祉会常務理事顧問（同理事）

▼梅津明生・石巻カトリック幼稚園副園

長兼任

▼H・シュルテンベルゲル（ミレヘム）

当分の間、大船渡教会主任司祭代行

## 地区制度のあゆみ

89年11月から始まった仙台教区の地区制度（ブロック制）は現在、宮城県南、仙台中央、会津の3地区で行なわれているが、宣教体制の変更ともなる地区制度は、現在のところ活動状況に地域によって大きな違いが出てきている。

その中で長所とともに、大きな課題があることを認めなければならない。それは司祭と信徒の意識を変えることの難しさである。時代の流れの中で取り組み始めた地区制度は主に信徒の司牧面に力が注がれ、新たに宣教できるまでには行っていない。

宣教という大きな課題に向けて司祭、信徒ともに、相当の試行錯誤、忍耐、宣教への意識改革、熱意を持つことが求められている。時代を先取りして歩む各地区のために各地の信徒の理解と祈りを願う。

ハイソリッヒ・シュトレーベル神父 帰天

1992年2月18日ハイソリッヒ・シュトレーベル神父（ベトレヘム外国宣教会）は病氣療養中、心不全により岩手県立中央病院で帰天。72才。

葬儀は2月22日に佐藤司教の司式により四ツ家教会で。

スイス出身。1940年司祭叙階。

1951年来日し、以来40年間、一貫、千厩志家、大船渡で宣教司牧に従事。



仙 台 司 教 区 統 計 (1991. 1. 1~1991. 12. 31)

面 積 (青森、岩手、宮城、福島県) 45,944.34Km<sup>2</sup>  
 総人口 (4県) 7,272,712人  
 信徒数 11,903人  
 (滞日外国人は人数が把握できないために含まれていません)

信 徒 数		青 森	岩 手	宮 城	福 島	計
信 徒 数	男	823	707	1,597	1,091	4,230
	女	1,528	1,290	3,043	1,812	7,673
	計	2,351	1,997	4,640	2,903	11,903
秘 跡	洗礼 (幼児)	9	23	43	30	105
	(成人)	23	28	80	48	179
秘 跡	堅信	8	31	79	51	204
	結婚 (信徒)			5	3	8
秘 跡	結婚 (他宗教者)	8	23	32	16	79
	(他宗教者)	37	104	90	59	290
教 会	巡回教会	12	14	17	14	57
	集会所	2	2	3	4	11
	男子修道院	3	1			4
教 会	女子修道院	8	4	15	6	33

教区外  
 (司教 1)  
 (司祭 3)  
 (神学生 8)  
 ※6教会は  
 司祭不定住

教区司祭

司教 2人  
 司祭 31人  
 神学生 3人

宣教会、修道会司祭

邦人司祭 1人  
 外国人司祭 44人  
 “ 神学生 5人

修道者

邦人修道士 3人  
 外国人 “ 1人  
 邦人修道女 283人  
 外国人 “ 34人  
 修練女 9人

教会学校、要理・聖書研究

	男	女	計
幼児、小学生	345人	429人	774人
中学生	82人	101人	183人
高校生以上	139人	490人	629人

教育事業

短期大学	3	1,559人	中学校	6	1,262人
専門学校	1	67人	小学校	8	1,784人
高等学校	8	6,650人	幼稚園	51	8,318人

社会事業

病院	1	132ベット
診療所	1	4,800人
老人ホーム	5	301人
精薄児・者施設	3	67人
養護施設	6	331人
保育園	9	599人

一般事業

センター・会館	4	25,302人
学生寮	1	12人
音楽教室	1	103人
祈りの家	1	1,462人

## 教区センター

施行業者決まり、6月着工へ

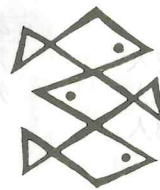
教区センター建設常任委員会は3月13日の会議で教区センター建設業者を鹿島建設(株)東北支店に決定した。業者選定は建設資金の制約もあって、一般的に行なわれる競争入札ではなく特命として行なわれた。建築確認用の教区センター設計図も出来上がり、建設工事はよいよ本格的に始まることになる。

工事に先だって元寺小路教会では4月26日に、「聖堂感謝のミサと集い」を行ない教会にゆかりのある人を含めた多くの人がカテドラルとして、また多くの人の祈りの場として親しまれてきた聖堂とのお別れをした。聖堂解体工事の第一段階として盛岡出身の船越保武画伯による「十字架の道行き」が取り外され、盛岡に建設される予定の美術館に展示するため盛岡に向けて送り出された。

他方では工事中の仮聖堂となる信徒館の改造や倉庫となるプレハブ家屋の工事、庭木が移植されるなど、教会の敷地内は慌ただしさを増している。

建築期間中、種々の施設は仮のものになり、信徒館一階は聖堂と小教区事務室、二階は集会室、司祭居室となる。教区事務所は現聖堂裏の建物を半分残して使うことになる。駐車場は工事期間中、教会敷地内に

設けることができないので、車で教会に来る人は一般の駐車場を利用してもらうことになる。ただし、日曜日午前に限りミサに来る人のために白百合学園の駐車場が利用できることになっている。聖パウロ書院は今までの場所で従来通り営業を続ける。



## アマゾンの旅して

佐藤 修神父

今年の1月30日から3月15日まで首藤神父を訪ねてブラジルを旅し、本当に実際行ってみなければその国の状況、社会や経済の状況がどれほどのものか、わからないということ強く感じました。

2月1日から23日まで首藤神父と一緒にアマゾン川流域のサンタレンに滞在しました。その23日間のうち2週間はサンタレンの町を離れ、船で村々を訪問しました。アマゾン川を船で行ったり来たりすると聞くだけで何かロマンチックに感じる人もいるかも知れませんが、そんな甘いものではありませんでした。自然の厳しさ、恐さというものを本当に強く感じる事ができました。また、村の人たちの生活の厳しさと貧しさ、とくに食事の貧しさは一日や二日

は何とかなりますが、日本人である私にはとても耐えられないものです。

一週間、村の訪問をしただけで、本当の気持、日本に帰りたくなりました。食べなければと思いながらもだんだんと食欲がなくなってしまう。こんな話を聞いてもなかなかアマゾンの自然の厳しさ、あるいは、そこで生活している人々の貧しさを理解できるものではないと思います。いろんな人に何度も同じことを、撮ってきた写真を見ながら話しましたがどれほど真意が伝わっているのか疑問です。ただアマゾン川まで行って首藤神父の気持、思いを少しは共感できるのではないかと思っています。

それから、村に住んでいる人たちの教会に対する姿勢は本当にすばらしいものを感じました。首藤神父は現在29の村を一人で担当しています。村には年に3〜4回しか行くことができません。つまり、ミサは年に3〜4回、または3〜4ヶ月に一回の割でしかミサがないということです。ですから、自分たちの信仰は自分たちで育て、自分たちで守っていくという姿勢をとっていかなくてはなりません。

教会の中でリーダーを養成していく、人間を育てていくという姿勢、教区の基本方針にそって共同体を運営していくという姿勢は私たちの教会にとっても大切なこととして感じました、これからやっていかなければならないことです。



フィリピンだより (1)  
スラム・エスペランザより

齋藤 知子

私たちは心が震えるような感動の経験を日常の生活の中でしているだろうか。

私は今フィリピンのイロイロ市のスラムの一つの小さなクリスチャンコミュニティで生活している。日本での生活を振り返ると、悲しいことに一度も涙の出るような感動をした経験を私は持っていなかった。

1987年8月に、初めてこのコミュニティを訪れたとき私は涙の出るような感動をした。貧しいと言われている人々が、突然日本からやってきた言葉も分からない見知らぬ私たちのために歌い、祈り、キスしてくれた。その心の中の静かな、そして刺激的で喜びに満ちた感動は一瞬にして、日本での生活を捨てる決心を私にさせた。あの感動のために私は何を失っても良かったのだ。

1988年12月夢が現実になった。私はコミュニティのメンバーとして祈りと奉仕活動中心の生活に入った。ここで生活しはじめて、あの時の感動は貧しい人々を通してキリストの愛に触れたということに気付いた。キリストが私を愛しているというところを無意識のうちに感じとったのだ。

わたしはここで多くの感動を心に刻みこんだ。キリストを感じたあのときが私の感

動の元なので、人々を通してでも、一人で聖書を読んでいるときでもやってくる。

去年(90年)のクリスマス、私はとても感動的な出来事に会った。去年からスラムのコミュニティは初期のキリスト教共同体を目指し、少し離れた農村に同じ大きさの家々を立て始めた。そして、フルタイムスタッフの家族がそこで生活し始めた。

クリスマスから数日後、私はコミュニティを作った夫妻の子供、ジェイビー6才とマジヨ5才と散歩していた。私たちは台風で大きなマンゴーの木やココナツの木が倒れ、竹で作られた家々も壊れたままに見える刈り入れの終わった田んぼで一人のおばあさんと出会った。

子供たちは見知らぬおばあさんに声を掛け、彼女は足を止めてニコニコして近寄ってきた。それから私たちはそのおばあさんとしゃがみこんで話をした。好奇心でいっぱいの子供たちの質問に彼女は「この前の台風でね、屋根が飛ばされてそのままなんだよ。うちは貧しくておかずも買えないんだ」と答え、それから彼女は薪を取りにくくと言って歩いていった。子供たちは家に戻り母親にその話をし、家にある米と魚の缶詰をおばあさんにあげたいとしつこく言い出した。母親は「あげる前にちゃんとクリスマスソングを歌いお祈りしなさい」と言い、米と缶詰を渡した。再び私たちはおばあさんを探して歩いたら、薪を抱えて歩

いてきたところだった。

子供たちはおばあさんのためにクリスマスソングを歌い、ジェイビーが照れくさそうにぼそぼそ祈り始めた。「キリストがおばあさんにクリスマスプレゼントをくれました。これは僕たちからではありません。キリストはおばあさんを愛しています。マリア様も。だから、僕たちを通してプレゼントをくれたのです。これからもお守りください」

なんと言うお祈りだろう。飾ることのない心からの祈り。おばあさんは手に持っていた薪を地面に落として泣いた。私の目からも涙が流れていた。おばあさんは地面に膝まずき二人を抱きしめて祈る。「神よ、きょう私のところに小さなキリストが訪れました。あなたはこんなにも私を愛してくださっている。ありがとう」と。

私はフィリピンにいて、人々の心がキリストの愛で満たされているのが見える。それは感動となって私の心に刻まれていく。時がたっても色あせない記憶。それはキリストの愛。いつか日本でそんな経験を多くの人と分かちあっていたい。それが私のミッションなんだと思う。

齋藤さんは水沢教会出身。  
看護婦の資格を持つカトリック  
信徒宣教師会のメンバー。

1988年よりフィリピン滞在  
※ 原稿は91年11月到着。



フィリピンだより (2)  
 聖ウルスラ会・マティ修道院より

シスター鈴木 照子

フィリピンの地を踏んでからもうすぐ3年になりますが、派遣先であるマティに居を構えてからはわずか一年3ヶ月にしかありません。しかし、家庭訪問を始めた手探りの頃に比べれば、ずいぶん変化が見られます。それは昨年7月に完成したキヨスク(野外集会場)が幅広く利用されるようになったからです。公立の高等学校の生徒たちの年一回の黙想のため、また先生方やカテキスタたちの黙想のため、セミナー、集会、土曜学校、神父の集まりなどでたくさんの方々が訪れました。また、別の形ではマニラ、ダバオ、コタバトなどからの訪問客がありました。相談事を持った人や病人なども毎日のように訪ねてきます。

ところで、昨年の9月頃から不規則な停電があり、マイクが使えなくなったり、水も使えなくなったりが随分長いこと続きました。キヨスクの利用者が多いときは本当に大変でした。停電は数日間の時きもありました。雨不足のため節電を余儀なくされていたのですが、今年に入ってもまだ続いています。しかし、以前のように数日、数時間もということから開放され、一日おきとか一時間半に短縮されてきました。クリスマスシーズンは停電のピークで、昨年



現わしを尊敬としてとばことのみを神の聖書で学校土曜  
 儀式というをするキスに一人一人が子供たち

のクリスマスはとても静かな雰囲気の中で過ごしました。でも、電気が灯るとワァーと下町の方から歓声があがり、私たちも思わず、サラマッテ・サ・ディオス(神に感謝)と声を出しました。

これとは反対に、あるとき水の使う量が多過ぎてタンクに穴があくということが何度か続きました。タンクの修理の間は水を使えません。私たちの水道は電力式なので

停電と同時に水を使えなくなるのですが、電気があるのに水が出なかったり、水があるのに電気がなかったりのハプニングもありました。停電になると料理はウーリンという炭を使っています。

水、電気があるのがあたりまえのように過ごしがちの私たちですが、たび重なる停電を通して生活の知恵がもたらされたばかりでなく、光である主がいつも共におられるという確信から、暗闇にあってもいつも希望へと駆り立てる主への信頼がいつそう深まる機会となりました。

ハプニングと言えども他にもたくさんあります。闇にまぎれて水を無断で汲んでいく人、ミサに出かけている間に洗濯、洗髪していく人、水牛や山羊を放牧していく人、使うためにまとめておいた材木の物色、コナツツの実を泥棒する人たちの話し合いなどです。ひとこと言ってくればこちらも気持ちよく分けてあげられるのに、と思うのですが、そんなとき土地の人は「マウラオ」恥づかしいと言います。こちらは黙って取るほうが恥づかしいと思うけれど長年のしきたりなのでしょう。

しかし、根気よく話していくうちに解決することもたくさんあります。私たちは言葉は充分に使えませんがすべては言葉の問題ではなく「心」。どういう気持ちで人と接していくか、いつも問われています。外国人と見たら「ちょうだい」と自動的に手を



差し出す人、平気で嘘をつく人、または盗みなどは長い歴史の中で繰り返されてきた貧困が産んだ悪い結果でしかありません。私はそうさせてしまった側に立つ者の一人であることを否定できません。

一人一人の中に潜んでおられるイエスとの出会いを求めながら、言葉、文化、習慣の異なる国でどのように歩んでいくかが私たちの課題です。今、身近かにはいつも影となって支えてくれる仲間がたくさんいますから頼もしい限りです。

そんな私たちのところに4月からフィリピン女性4人の入会が決まりました。これから新メンバーを迎えて新しい共同体づくりが始まります。問題はいつもあり、また限りなくあると思いますが、「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、すべての事について感謝しなさい」(1テサロニケ5・16、18)のみことがすべてを解く鍵と信じています。 ※原稿は3月末到着

ミニ一 性情報

『外国人問題』研究会

この研究会は宮城県に住む人を中心として『外国人問題』に取り組む組織です。この組織は弁護士、社会人、学生などいろいろな人たちがそれぞれの立場から、日本の中で大きな問題となっている滞日外国人に関わる問題に取り組もうとして作られたも

のです。会にはキリスト教関係の人たちも加わっていますが、今のところカトリック信徒は教人だけです。

研究会では5月22、23日に外国人ホットラインをおこないますが、東北各県のボランティア団体、教会などと連絡を取り合いネットワークを広げたいと望んでいます。そのため、協力出来る団体を紹介してほしいと呼びかけています。他に、ボランティアの勉強会の企画も予定しています。

連絡先 小島妙子 (Kojima Misuko)

聖書のことは

なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。

(ルカ24・5、6)

イエスの復活は人の理解を越える出来事である。しかし、理解はできなくとも信じるのが求められている。「十字架で死んだイエスは生きている」これが信仰の喜びの始まりである。驚かせることから始まる救いへの歩みを神が導くと信じて身をゆだねよう。

一冊の本

「何をどう祈ればいいのか」

アントニー・デ・メロ著  
出版元 女子パウロ会

この本のテーマはあくまでも祈りについてはあるが、同時に黙想会はどんなふうに行なわれるかという一例を見せてくれる本としても価値がある。

私たちは初心者のみならず祈り、黙想がそれほど簡単ではないことを日常生活の中で経験している。それだからこの本は多くの人に読まれ生かされたらいいだろう。

訳者によればこの本はアントニー神父が自分の体験したことにあずかるよう、ぐいぐいと読者を引きつけるやり方をとっている。講和の主題が祈り、悔い改め、キリストへの愛となっていることは信仰者の根本原理に関わるものとして、信仰生活を見直そうとする人にも、これから信仰生活を始めようとしている人にも意義深いものとなるだろう。

一人の人の経験は絶対ではないが、ある人を通して祈りについて学ぶべきことが伝えられていることを喜ぶたい。祈りを通して神を体験したい人は時間を十分に取って(1)神を熱望すること(2)勇気と寛大さを身につけるようにとのアントニー神父の最初の呼びかけにまず耳を傾けたい。



# 教区のおい

教区神学生 和野信彦

3月の始めに私たち神学生は昨年より新司祭として会津若松教会で働いている氏家神父の招きにより、信徒の皆さんと「神学生を囲む会」を持つ機会に恵まれました。今回、教会を訪ねたのは仙台教区神学生のうち二人と、認定式前の黙想を一緒にした鹿兒島教区の神学生一人の三人でした。

訪問の目的は教会の皆さんに教区の神学生が存在を知っていただくこと、神学生が一粒会を通して様々な方の援助によって生活していることに対し感謝の気持ちを伝えたいということ、そして、司祭を目指す青年としての我々の思いを語ることにより小教区での司祭召命について考えていただければというものでした。

私たちはこの会において神学院紹介のビデオを見ながら神学院での毎日の生活や司祭になるまでのステップ(過程)について説明し、信徒の皆さんからはいろいろな質問攻めに遭いました。皆さんの司祭召命に対する思い、神学生に対しての思いがひしひしと感じられ、私たちにとっても大きな経験となりました。


教区を離れて東京の神学院(正式名称東京カトリック神学院)で生活している私たちが、教区内の教会を訪ねることが出来るのは夏、冬、春の休暇中のみです。在京中

に教会に関わらないわけではないのですが仙台教区の教会の大きさ、雰囲気は少なくとも東京とは異なります。その教区のおい

をわずかな休暇中に感じて、それを持ってまた東京で生活していく課題としていくことが出来るようにしていきたいのです。私たちはまだ訪ねたことのない教会も多くあり、まだお話ししたことのない神父様もいます。私たちは一人一人様々な思いを持ちながら将来教区で働くことを夢見ています。旅してみると長くて広い仙台教区。休暇中に訪ねることが出来るのはわずかですが、訪ねる機会に恵まれたならば教区の神学生がいるということを知っていた

だきたいと思えます。これからの司祭召命を心から願っているのは私たちも同じなのです。まだまだ未熟な私たちですが、つかの間の教区のおいを得て、また神学院での生活を頑張っていきたいと思っております。私たちの後に続く後輩を待ち望みながら。

新園舎落成



黒石市にある聖テレジア幼稚園は昨年6月から園舎の新築工事をしていたが、12月に園舎が完成し、3月7日に落成記念式典と祝賀会を行なった。新園舎は鉄骨造2階建一部地下室がある立派なもの。

新たに修道会、喜多方市へ

グアダルペ外国宣教会では喜多方カトリック千草幼稚園の運営を修道会に依頼することを考えていたが、この程クリスト・ロア宣教修道女会(本部東京)が引き受けることになり2名のシスターが喜多方教会内に住むことになった。

## 修道院閉鎖

○養護施設聖マリア園を3月末で閉鎖した  
無原罪聖母宣教会は施設と同時に桃見台修道院も閉鎖した。

○オタワ愛徳修道女会は八木山修道院を3月末で閉鎖した。

## 編集後記

文章を書くことは本当に難しいと思いついたときの喜び▼一抹の不安を残しながらも何とか多くの人の目に触れればいいなと願います▼読んだ人にどんな思いがわくにせよ何かを感じてくれればいいのです▼今度、編集の協力者が名乗りを上げました。次号から働き始めます▼他にも多くの人の寄稿、情報提供などの協力を期待しています。